

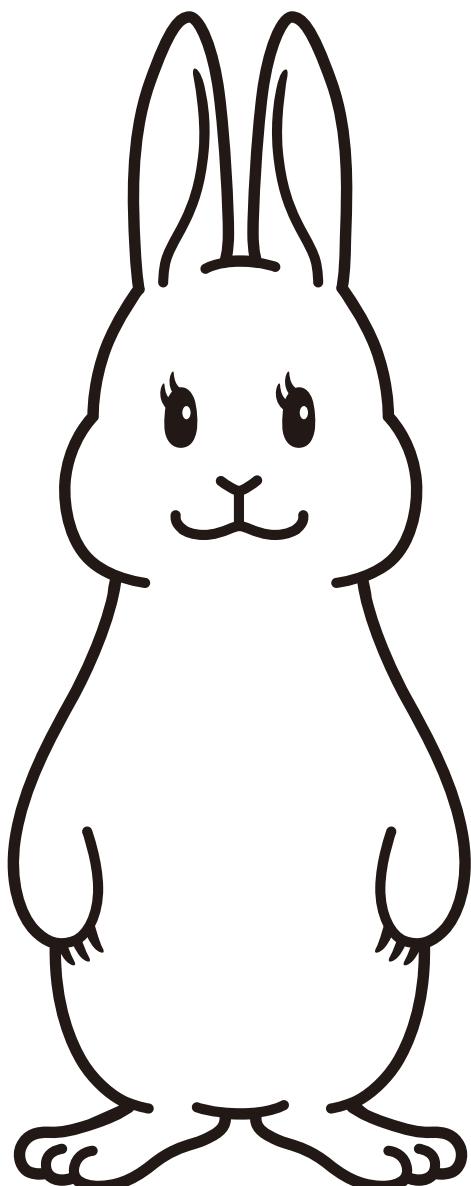
CorroMog.



「地域の物語」
1960年代の世田谷
2011-2012

ワークショップ・レポート

『キャロマグ』ってなに？



三軒茶屋のキャロットタワーにある世田谷パブリックシアターには、ちょっとややこしいのですが、組織名と同じ「世田谷パブリックシアター」(600席)と「シアタートラム」(200席)という2つの劇場があり、年間を通じていろいろな演劇やダンスの作品を上演しています。

ですが、世田谷パブリックシアターの活動はこうした劇場での上演活動に留まりません！3つある稽古場や、セミナールーム、世田谷区内の小中学校や児童館、高齢者施設などで、小学生からお年寄りの方まで、ありとあらゆる方たちが参加できるレクチャーや演劇ワークショップを行っています。

キャロマグは、そんな世田谷パブリックシアターの、通常目に留まることの少ないこうした活動を不定期でご紹介する冊子です。オレンジ色のキャロットタワーにある劇場の冊子だから、キャロットマガジン。それを短くしてキャロマグ(CarroMag)。ご案内をつとめるのは、うさぎのキャロちゃんです。

一気にいろいろご紹介はできませんけれど、これをお読みのみなさんに、少しずつ世田谷パブリックシアターの活動を知って頂きたいと思っています。もし、ちょっとでもご興味をもって頂けるような内容がありましたら、今度はぜひ参加しにいらしてくださいね。

CarroMag.

Vol.1 | Mar.2013

CONTENTS

ワークショップ・レポート

『地域の物語』2011-2012

テーマ「1960年代の世田谷」について	2
2011-2012『地域の物語』概要	4

Aコース 「1(いち)からコース」 進行役 すずきこーた／吉田小夏	6
--------------------------------------	---

Bコース 「1964 消えた○△□」 進行役 瀬戸山美咲	8
---------------------------------	---

Cコース 「カラダの未来」 進行役 山田珠実	10
---------------------------	----

ワークショップの歴史 『地域の物語ワークショップ』の今までとこれから 成沢富雄	12
---	----

ワークショップ参加者からの声	14
----------------	----

CarroMag. Information	近日開催予定の主なイベント・ワークショップ 学芸スタッフから おまけマンガ『たまにはこんな役 #1』 編集後記	16
--------------------------	--	----



テーマ「1960年代の世田谷」について

世田谷パブリックシアターが開館した1997年からずっと継続してきた事業『地域の物語ワークショップ』は、参加者が取材をし、演劇やダンスの作品を創り、劇場で発表するまでを数ヶ月かけて行うワークショップです。過去には、参加者自身がテーマ自体から探していくこともあれば、進行役が劇場スタッフとあらかじめテーマを決めて募集することもありましたが、2011年度は、劇場が先にテーマ「1960年代の世田谷」を決め、それから進行役の方たちに声をかけるという形を採りました。

このテーマを設けるに至った理由はいくつかあります。

1960年代は、経済成長率10%を超える高度経済成長期を迎え、日本全体が激変した時期です。世田谷の風景もガラッと変わりました。特に戦後復興の象徴として1964年に開催された「東京オリンピック」のために、赤坂や代々木の国立競技場から駒沢オリンピック公園までの導線となる国道246号線が拡張され、首都高速道路3号渋谷線、さらには環七通りが開通したこと、道路脇の商店街やまちなみが大きく変わりました。そして、この頃までに、東京の中心に葉野菜を供給する農地であった世田谷は山の手ベッドタウンへと変貌を遂げ、それに伴い人々が流入し、そして流出するようになっていったのです。まず、現在の世田谷の風景の基盤をつくりあげたこの時期を知る人たちに、様々なお話を伺ってみたいと考えました。

同時に、1960年代や昭和30年代は、「古き良き日本」というノスタルジーの対象として、輝かしい時代として、語られることもよくあります。しかし、本当にそうだったのか？ 当時を生きた皆がみな、本当にそう思っていたのだろうか？ そんな疑問も立ち上りました。例えば、2008年の北京オリンピックでは野良犬が一掃されましたか、まちをきれいにするために、様々なものが排除されるということは日本でも起

いています。1960年に国は精神病院の設立の規制を緩和し、私立の精神病院が大増設され、当時浮浪者と呼ばれていた人たちは「精神病者」のカテゴリーに入れられ、囮い込まれたといいます。つまり、右肩上がりの社会が見たくないモノを、見えないモノとして括りこみ突き進んでいく、そんな時代でもあったのです。

1960年代への関心は、東日本大震災によってより強くなりました（劇場スタッフがこのテーマについて話し合っていたのは、2011年の4月頃、まさに震災の直後でした）。日本初の原子力発電所である東海発電所が着工したのもまた1960年で、福島県庁が原子力発電所の誘致を議決したのは1961年ですから。現在の日本を生み出したルーツが、この時代にあると言ってもいいのかもしれません。

いまここにある自分たちの立ち位置をみつめてみると、そして、ひとりひとりの想いや意見が違うことを出発点にしながら、参加者みんなで協力して作品をつくりあげていくこと——

「1960年代の世田谷」というテーマはそんなふうにして生み出されました。そしてそこに面白を感じた約40名の参加者が集い、共に作業を進めることとなったのです。



↑『地域の物語 2011-2012』 参加者募集案内リーフレット

2011-2012『地域の物語』概要

2011年度の『地域の物語』は、「1960年代の世田谷」というテーマの下、3つのコースが設けられました。「1からコース」(Aコース)は、まちを歩く取材を通じて、参加者と進行役とでテーマや発表の形を探りました。「1964消えた○△□」(Bコース)は、テーマを「1960年代に消えたもの」に絞って取材し、参加者たちのさまざまな出会いや発見をもとに、進行役の瀬戸山さんが台本にしていきました。そして「カラダの未来」(Cコース)は、ダンスを通して自分のこころとカラダ、そして身近な人たちを丁寧にみつめ、そこで気づきから作品をつくることを目指しました。参加者それぞれが自分たちで探し出した1960年代の記憶、モノ、心象風景。これらを手がかりに数ヶ月かけて創り上げた作品を、2012年3月25日に発表しました。当日は200名以上の方にご来場頂き、立見もたくさん出るほどの盛況となりました。また、4月15日には、上映会＆ふりかえりも行いました。

『地域の物語～1960年代の世田谷』

2012年3月25日(日) 14時～ @シアタートラム

照明	西倉淳(デザイン)、三谷恵子、杉本公亮
音響	小笠原康雅(デザイン)、遠藤瑠子
舞台	木村光晴
舞台監督	酒井詠理佳
プロダクションマネジャー	福田純平
全体アドバイザー	成沢富雄
制作	恵志美奈子
主催	公益財団法人せたがや文化財団
企画制作	世田谷パブリックシアター

後援
世田谷区

協賛
アサヒビール株式会社、東レ株式会社
平成23年度文化庁優れた劇場・音楽堂からの創造発信事業



↑『地域の物語～1960年代の世田谷』
発表会告知チラシ

「てくてくチクタクぼくたちの地図」

Aコース

大迫健司、上條弥恵、きっかわにけ、けんほ、ささきゅうこ、佐藤美智子、志田武志、城間さゆり、関大輔、武田祐美子、仲路末平、藤原稔久、星光子、三宅弘朗

進行

すずきこーた(演劇デザインギルド)、吉田小夏(青☆組主宰)

進行アシスタント

大久保慎太郎

学芸

山本大

学芸アシスタント

池上綾乃

「1964消えた○△□」

秋山敏佑樹、上田恵子、小岩井真由美、小枝冬実、高本義也、富岡大策、富永瑞木、難波トモユキ、新岡みづき、原田ミノル、hiro、藤本圭子、松浦美夢、松尾元、まっちゃん瀬戸山美咲(ミナモザ主宰)、九谷倫恵子、田幡裕亮

みんなで
つくって
いるんだね!

「カラダの未来」

上田正敏、金田海鶴、さや、しげ、白鳥義明、たかのっち、土田悠、みやこ、ポラン

進行

山田珠実

進行アシスタント

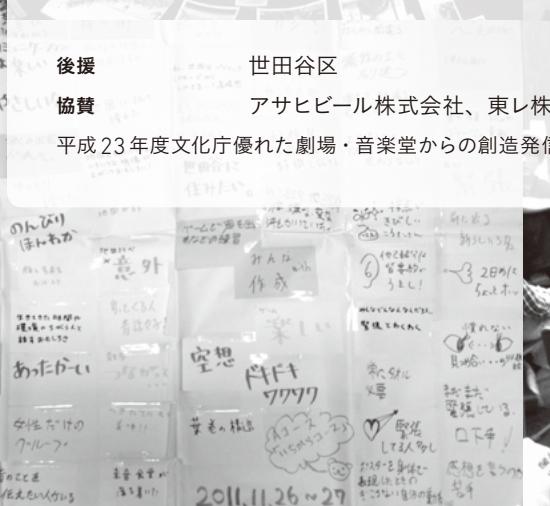
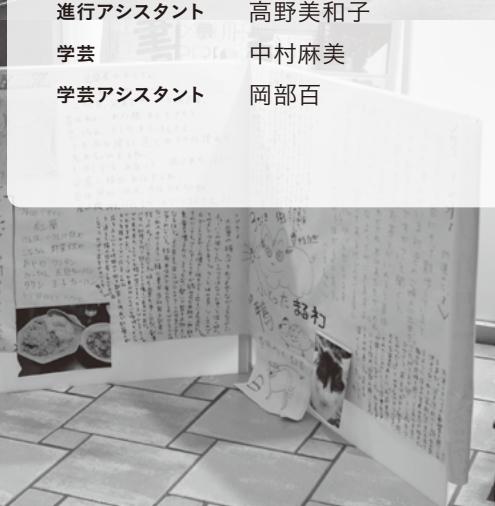
高野美和子

学芸

中村麻美

学芸アシスタント

岡部百



1(いち)からコース

2011年11月26日[土]～2012年3月24日[土] 全16回

小グループに分かれて、気の向くままにまちを歩き、人々と出会い、1960年代についてお話を伺うことからスタート！新聞づくりや聞き書きなども体験しながら、参加者自身が、テーマも、発表したい演劇の形も探っていく、まさに「1からつくる演劇」コース。

ヨイショーから見えるもの

Aコースは、地域を取材して演劇をつくる、誰でも参加できるワークショップです。しかし「ネタ・素材」集めとして取材をするわけではありません。地域を訪ね、人と出会い、考え、演劇をつくり、取材させて頂いた方やその他の方に、思ったこと・感じたことを伝える、そして世田谷や自分の住むまちや人と新しい関係が始まる、その第一歩として取材があります。劇場や演劇を閉じたものにしてはならないという想いもあるかもしれません。「話したい人は多い」「発表の時、みんなの身体がやわらかくなってきた」「表現方法に、人柄や関係性があらわれるなあ」「私、本当に暮らせるのかなー、一人で…、とか思う」(全て参加者の声)。様々な発見を通して、個人や集団での表現方法を考え、Aコースの発表の最後の言葉の「ヨイショー」に繋がりました。初期の段階に参加者が偶然見つけたものでしたが、まち、人、自分たちをよく表現しているものだったと思います。

Aコース進行役・すずきこーた

「1(いち)からコース」を終えて

『地域の物語ワークショップ』の発表会が終わってから約一ヶ月後。夕暮れ、地元の駅に降り立ち家路に向かう私の耳に、スーツ姿の若い夫婦の会話が飛び込んで来ました。「あ。ねえ、桜。舊、だいぶ膨らんでる。」「ああ。」「もうすぐ咲くね。」「この木は、残してホントよかったですよねえ。」私は、思わず立ち止まりました。そしてその桜の木を見上げました。

私の住む町は、駅の改札口の目の前に大きな古い桜の木があります。十年程前の駅前の大開発の時、市民の必死の署名活動で残されたものです。かつての私は、それを情報としては知っていたけれど、自分のことのようには思えなかった。私が生きている、この街。

多くの参加者が振り返り会の感想で述べていたように、進行役の私自身も、このワークショップを通して、町の見え方が今までとは一味変わったという実感があります。みんなで何度も街を歩きじっくり演劇を創った半年間は、実りある豊かな時間でした。

Aコース進行役・吉田小夏



まるさんかくしかく 1964消えた○△□コース

2012年1月21日[土]～3月24日[土]全13回

「1960年代に消えたもの」をテーマとし、昔と今の地図を見比べたり、まちの人々にインタビューをしたりしながら探索。「人に伝えること」にも焦点をあて、壁新聞や地図等を作成。そして現れてきたたくさんの人々の言葉や想いを進行役の瀬戸山美咲さんが台本にし、作品に。

話を聞くこと、それを伝えること

「1960年代に消えたものを探す」というテーマに沿ってみんなで取材し、それをベースに私が台本を書き、みんなで演じる——。作品の創作過程のうち「テーマ探し」や「台本づくり」はあえて飛ばし、「取材」と「演じる」に特化した体験をしてもらうのがBコースの狙いでいた。そこには、地域の物語の目的のひとつである「地域の方に観てもらう」を重視し、台本のある状態で発表会を意識した稽古をおこないたいという想いと、普段演劇をやっていない参加者のみなさんに「演じる」ことの楽しさを知ってもらいたいという想いがありました。

「取材」の過程では、街歩きのほかに「キオクオシエテ！プロジェクト」と称して60年代を知る方を招いてインタビューをおこないました。じっくり腰を据えてお話を伺うことで、60年代に対して参加者それぞれが自分なりの見方を持つことができました。そういうたなみの声も出来る限り拾い上げて台本を構成することが私のミッションでした。また、途中で

おこなったブラインドサッカーワークショップも作品づくりに欠かせませんでした。アイマスクをして身体を動かすことは、おのずと人を丸裸にします。自分の考えをいつも以上に言語化して伝える必要があるからです。このワークショップで見えてきたひとりひとりの個性は、劇中のキャラクターに大いに反映されました。

「演じる」過程では、台詞を覚えることの難しさや、大きな声を出すことの恥ずかしさといった、演劇の最初の壁のようなものが見えました。しかし、みんな楽しんでこの壁に挑みました。「自分ではない誰か」を演じることで、今まで気づかなかった新たな自分と出会えたといった感想もいただきました。演劇の持つ効能を改めて感じた瞬間でした。

結果、個々の持つエネルギーが爆発するような作品が生まれました。公演後、メンバーは取材先の商店街を改めて訪ねたそうです。こうした公演にとどまらない広がりも地域の物語の魅力だと思いました。

Bコース進行役・瀬戸山美咲

1

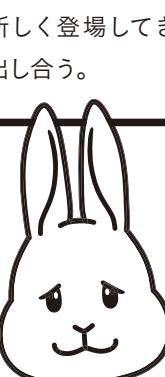
仲間と 出会う、知り合う

好きな動物を挙げて自己紹介したり、2人組になってお互いのことをインタビューし、相手を紹介する俳句をつくったりと、参加者同士が知りあうところからスタート！

2

1960年代に 消えたもの

1955年と2011年の世田谷区の地図を見比べて、何がなくなっていて、何が新しく登場してきたかを出し合う。



キャロット
タワーも
なかったんだね

7

台本をもとに 練習

これまでの取材をもとに瀬戸山さんが台本を執筆。15名の参加者全員が家族という驚きの設定！時間がないなか、頑張って台詞を覚え、自主稽古をしたり、WS後も居残ったりして練習し、発表へ！

発表！

6

まち歩き2

2チーム(二子玉川／九品仏+等々力)に分かれてまち歩き。商店街の方たちに60年代当時のお話を伺い、その体験をもとに小作品をつくって発表！

5

ブラインド サッカーエクスperience

ブラインドサッカー日本代表選手の寺西一さんを進行に迎え、特別WS。目かくしをした人に言葉だけで指示して自転車の絵を描いてもらうなど、「人に伝えること」を体感。

4

まち歩き1

インタビューの話をもとに、関心ごとに3チーム(資料調べ／三軒茶屋周辺／電車と川)に分かれ、まち歩き。

カラダの未来

2012年1月20日[金]～3月24日[土] 全11回

自分のこころとカラダを丁寧にみつめる時間を大事にしたコース。
他人のカラダや声を受け止められるようになったところで、
参加者たちそれぞれの身近な人に取材。
近しい人が過去へ思いを馳せる際の「身振り」と、
60年代のどこか懐かしい音楽をもとに、作品を創りあげました。

「カラダの未来」を振り返る

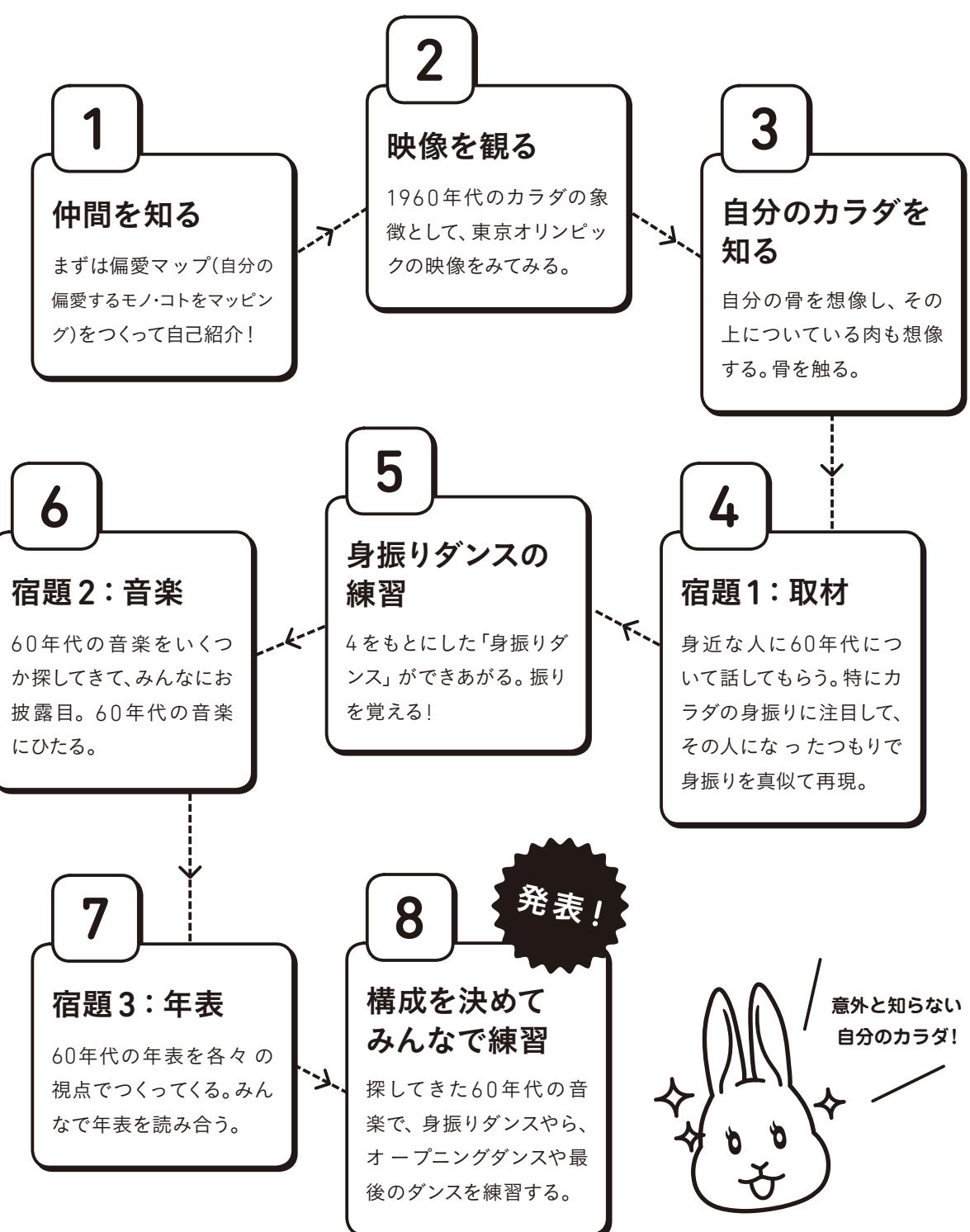
作品の軸として、60年代を生きた身近な人に各自でインタビューしてもらう宿題を提案した。宿題は、取材対象のその人として演じるというやり方で発表し合った。たまたま、父親に取材した人が3人。ある父親は、久しぶりに会った息子の質問に始めは首をかしげ、その後どんどん興がのって、居酒屋で楽しい一晩を過ごしていた。別の父親は、時系列に写真を並べ、高度成長期のただ中を快走して生きた様子を語っていた。もう一人の父親は、娘に昔の出来事を質問され、遠く臍になってしまった記憶をたどるのに難儀し、妻に助けを呼んでいた。

その取材をした参加者は、50代、3児の母。質問する自分自身と父親を一人二役で演じ分けた。「もう……、忘れてしまった」と呟き沈黙する、不安げな、それでいてぼんやりとした様子の父。「(その頃)私が生まれたでしょ?」と少し苛立つ娘。見ていて不思議な気持ちになった。「結局、すべての人はこの世から消える。そのように、すべての出来事はいつか過去

の彼方に消えるのかな?」そう思った。語られた60年代の出来事はどれも面白かったが、それ以上に、人が遠ざかる記憶を語ること、そのものの奥深さに立ち止まらされた。

ところで最近、最年少の参加者から婚約の報告が届いた。それぞれが60年代の出来事や自分史の年表を読み上げるというラストシーンのために、彼は自分の未来を年表に書いた。「2013年6月、結婚」。その通りになりそうだという。また、30代の女性から無事女児出産の報告も届いた。作品の稽古期間中に芽生えた命。女の子が生まれた日付は、44年前に生まれた私の誕生日だった。

100年もすれば雲のようにかき消えているだろう、私たちの経験や記憶のひとつひとつ。けれど、そのささやかな「ひとつ」の上に今が積まれ、未来が積まれる。時間はそのように流れ続ける。作品が終わってしまった後も、いろんなことが、生き生きと繋がりの中にあるのを感じている。



『地域の物語ワークショップ』の今までとこれから

成沢富雄（演劇デザインギルド）

Tomio Narisawa

世田谷パブリックシアターの「パブリックシアター」という名前には、「人が表現をするという行為は公共性を持つ」という意味が含まれていると思う。表現をすることは、芸能を専門とする人たちの営業行為にかぎったことではなく、誰にでも関係のあること、大切なことなのだという宣言にも受け取れる。

このような認識はどこから生まれたのだろうか。そのひとつの要因は、昭和40年代から始まって今も続く、世田谷区民による様々な活動が生み出してきた生活文化ということになるだろう。

高度成長期、車優先で、経済優先で進んできた社会の中で、より人間らしく生きることが当たり前になるように、多くの世田谷区民がその時々の課題の解決に悩み、隣近所、知人友人、見知らぬ市民に働きかけ、努力を重ねてきた。日照権、自主保育、冒険遊び場ブレーパーク^{*1}、障害者自身による自立生活運動^{*2}、障害者と健常者の垣根をはずそうという「雑居まつり^{*3}」、町の声があつまる「まちづくりハウス^{*4}」などなど……。こうした活動のなかでぶち当たる困難が人々をたくましくする。その中で発見された大切なことを言葉にする。見えないものを可視化する。見逃してしまいそうな声に耳をかたむけ、社会の中に場所をあける。ここには表現をつくるときと共通した態度・姿勢がある。どちらも現実を相手にし、その現実の先に一步でも進んでゆこうとしている。

こうしたいままでにない社会や生活スタイルを見つけてきた世田谷区民の経験が背後にあるからこそ、たぶん「パブリックシアター」という名前は世田谷にふさわしい。

『地域の物語ワークショップ』は、世田谷パブリックシアターのオープンした翌年1998年7月から始められた。演劇の専門家を含めて一般市民が参加し、人々の生活領域に取材という形でアプロ-

『地域の物語ワークショップ』事前に設定されたテーマ

()内のものは一部コースのみで採用。未記入の年度は、参加者がテーマから決定。

1998年度	—	2005年度	—
1999年度	—	2006年度	川
2000年度	—	2007年度	居場所
2001年度	本当に戦争があった頃の世田谷	2008年度	カフェ
2002年度	(子育て)	2009年度	岡さんの家TOMO
2003年度	(子育て、しごと)	2010年度	地域にひらく、地域にくらす
2004年度	(しごと)	2011年度	1960年代の世田谷

^{*1} 子供の遊び環境に疑問を抱いた両親が、ヨーロッパの冒険遊び場に感銘を受け、集まった住民たちと1975年に「あそぼう会」を結成。やがて国際児童年の79年に世田谷区が記念事業として冒険遊び場を探査し、地域住民と共に羽根木ブレーパークを開設したのを皮切りに、世田谷ブレーパーク、駒沢はらっぱブレーパーク、烏山ブレーパークなどが設置された。現在は、2005年に立ち上げられたNPO法人ブレーパークせたがやが、世田谷区より委託を受けて運営中。

^{*2} 世田谷区には光明養護学校という日本で最初の養護学校があり、家族ごと引っ越してくる家庭も多かった。とはいえた介助者である親の高齢化などの問題もあり、障害者の自立生活が大きな課題となり、様々な活動が生まれた。例えば「HANDS世田谷」では、自立生活プログラム、ピア・カウンセリング（当事者同士で話し合い助言する活動）、介助者派遣事業などを行っている。

^{*3} 羽根木公演にて年に1度行われている、地域における問題を扱う200ほどの団体や個人が参加するお祭り。住民が地域に主体的に関わっていくための交流を目的とする。1976年から、世田谷ボランティア連絡協議会がファシリテーターを務める。79年には直後に黒テントの公演が開催され

チし、一定のグループ作業を通じて作品をつくり出す。およそ一年で一つのサイクルが終わる。はじめは作家も演出家もいない、テキストは参加者自らが取材しつくる、そして演じ、集団の中で批評し合いつくり直すという手法を探っている。こうした作業の中からテキストをつくる、演出をするという役割が機能し、そうして目標に近づいてゆく。いまではどこでもその言葉を見受ける「ワークショップ」の手法をつかった集団創作の方法だ。『地域の物語ワークショップ』が始まった頃は、演劇だけでなく、まちづくりにも「ワークショップ」という手法が紹介され、道路をつくったり公共交通施設や公園をつくる都市計画など、従来の専門領域を市民にひらいでゆく方法として使われ始めていた。

なぜ劇場という施設がこのような活動を行うのだろう。演劇や舞踊は、だれか好きな人が勝手にやればよいし、一般の人は、時々それを見に行くだけでよいと多くの人は考えるのではないだろうか。だが、こういう「特に表現が好きでもない人」にも、地域の劇場はひらかれている。第一、好きな人たちだけではパブリック、つまり公共は成り立たない。「特に表現が好きでもない人」が日々繰り広げている生活のあれこれ、人と意を通じて物事を収めていく手際こそ、地域の劇場が大切にしたいものなのだ。生活のやりくり、日々の鬨いこそ、パブリックシアターの舞台が欲しているものだ。それでこそ「パブリックシアター=公共劇場」ではないか。

『地域の物語ワークショップ』は、こうして市井の人々の暮らし、意見、考え、思い出を取材し、舞台に現実を映し、そして隠れた声をあらわにする。ある日、そこで生まれる想像が現実を少しだけ追い越して、昨日の泣きたい現実に復讐をするなどという、そんな瞬間が生まれたらと願っている。

るなど、演劇との関わりも深い。80年代以降は、祭りの中心的存在だった障害者たちによる「太陽の市場工房」という表現活動や、住民参加のまちづくりワークショップ実施につながり、この流れは、世田谷区が、演劇を通してまちづくりの拠点として「世田谷パブリックシアター」と「生活工房」設立を計画する礎にもなった。

^{*4} 「玉川まちづくりハウス」は、80年代から活動を続け、1991年に世田谷区玉川地域で立ち上げられたNPO。食品や住環境など、生活に関わる問題について、行政や地域企業らと連携して様々な活動にあたっている。

ワークショップ参加者からの声

この年度の『地域の物語ワークショップ』に参加した人たちに、最も印象に残ったエピソードについて語っていただきました。

Aコース



三軒茶屋にあるタバコ屋さんの紹介で玉電博物館の店主にインタビューすることができました。栓抜きとシャンソンの話が止まりませんでした。ここのおやじさんのト書きを舞台でよんだことが一番印象に残っています。

[秋山謙歩／けんほ]



寒い風が吹く1月。「ブラタモリみたいだね」なんて言いながら、名前を書いたガムテープをつけたまま町へ取材に出たあのひと時。仲間達と他愛ない話をして、小学生みたいに、これ何だろう？ あそこは？って。大人なのに子どもにかえっていたあの何のことはない時間が今となってはとっても愛おしく感じます。たった3ヶ月でも愛おしい思い出です。[佐々木優子／ささき]

Bコース



取材にゲームに稽古とワークショップは楽しい冒険の連続。中でも一番は、女形という新境地。かつらと小道具を求め渋谷109に38歳にして初めて足を踏み入れる。毎回のワークで心身がほぐれ抵抗は消え、キャラクターを読まれたかのような脚本に戸惑いつつも、女形がしっかりと馴染んでいったのには自分でも驚いた！ これが演劇の力！ [高本義也／たかもっちゃん]



本番が間近に迫った日の帰り際のことだったと記憶しています。始まりは確か2～3人でのキャッチボール。楽しそうな雰囲気に、一人二人と加わり、自然にその輪は大きくなりました。誰かがボールと共に言葉を放ち始め、一つの間にかそこに出来た空気感が、本番へ向けてのみんなの思いを一つにするきっかけになったような気がしています。[新岡みづき／みづき]

Cコース



本番の舞台で、出演者の一人がダンスの振り付けを間違えました。それもかなり大胆に。本番終了後、そのことに話が及んだ時、たまちゃん（山田珠実さん）は心の底から楽しそうに笑っていました。普通振付家って、自分の振り付けを間違えられたら、いい気持ちはしないんじゃないでしょうか。それがたまちゃんは、全然そうじゃなかったのです。[白鳥義明／しら]



舞台に立つ。音楽がはじまる。今まで聴いた事がない音。ダンスを踊る。スポットライトをあびる。世界が自分だけを見ている恍惚。台詞を話す。みんな台詞を聞く。感情があふれてきて思わず涙。なんだこれは！ これが舞台の力、演劇の魔力なのか。表現の魅力にはまた人たちの気持ちが初めてわかった。[上田正敏／まあちゃん]

『地域の物語ワークショップ』参加者統計

参加者計 **38人** Aコース…14人 Bコース…15人 Cコース…9人

年齢

10代	（2名）
20代	（5名）
30代	（14名）
40代	（10名）
50代	（7名）

参加動機(複数回答可)

演劇や創作活動への興味	（9名）
地域への関心	（9名）
ファシリテーターに惹かれて	（6名）
舞台に立ちたい	（5名）
レクリエーション	（4名）
身体への興味	（4名）
過去WSに参加して楽しかったから	（4名）
好奇心	（3名）
もう一度演劇をやりたい	（2名）
値段が安い	（1名）
知人の紹介	（1名）
仲間づくり	（1名）
リハビリ	（1名）

職業

専門職	（11名）
会社員	（9名）
学生	（4名）
フリーター	（4名）
自営業	（2名）
公務員	（2名）
主婦	（1名）
無職	（1名）
その他	（4名）

本ワークショップを知った媒体(複数回答可)

ウェブサイト、ツイッター	（16名）
区報、置きチラシ	（7名）
公演折り込みチラシ	（6名）
口コミ	（4名）
新聞、折り込みチラシ	（3名）
その他	（2名）

過去のワークショップへの参加回数

0回	（9名）
1～4回	（12名）
5回以上	（17名）



CarroMag. INFORMATION

Mar.2013

近日開催予定の主なイベント・ワークショップ



『地域の物語～みんなの結婚』

日程 2013年3月24日(日) 15時～ 料金 入場無料 要予約

会場 シアタートラム

2013年は「みんなの結婚」が3コース共通のテーマ。まちに出かけ、取材したことからつくりあげた作品を発表します。



『中学生のための演劇ワークショップ』

日程 2013年3月26日(火)～31日(日) 対象 中学生

参加費 3,000円(全6回) 会場 世田谷パブリックシアター稽古場

学校、地域の垣根を越えて出会った同世代の仲間と、劇場で6日間、演劇づくりにじっくり取り組むワークショップです。



『デイ・イン・ザ・シアター』

日程 2013年4月5日(金) 対象 どなたでも

参加費 500円 会場 世田谷パブリックシアター稽古場

開館以来、不定期ながら継続して実施している、どなたでも大歓迎の「劇場を楽しむ」ワークショップです。

学芸スタッフから

★子どもの頃、竹馬にうまく乗れなかったのですが、大人になって竹馬に挑戦したところ、すんなり乗れてしまいました。子どもの頃に出来なかつたことが、全く訓練せずに出来たりすると、自分にもまだまだ可能性があるな、なんて思います。[たば]

★先日Bコースの同窓会がありました。あいかわらずな方、大人っぽくなった方、若々しくなった方、みなさまざま。20年後に同窓会をしよう！と盛り上がりましたが、そのころには、みんなは、私は、まちはどんな風になってるかな、と妄想を膨らませた一夜でした。[くたに]

たまにはこんな役 #1



編集後記

『キャロマグ』創刊です。合い言葉は「フレンドリー」です。演劇もワークショップ(WS)も、けっして敷居が高いものではなく、誰もが(その人なりのやり方で)参加できるものだと思います。WSって何？怖いの？密室？みたいなイメージもあるかもしれません、全然怖くないので(笑)、自分に合いそうだなと感じるWSがあったらぜひ参加してみてください。思いがけない出会いや発見があるかも？

世田谷パブリックシアターのWSには、子供向けから、ひろく一般にひらかれたもの、あるいは創作活動のプロを対象にしたものまで幅広いタイプがあり、また、各種レクチャーなども開催されています。『キャロマグ』ではそうした多岐にわたる活動を随時紹介していくので、不定期刊行ではありますけども、温かく見守ってくださると嬉しいです。

今号は、1998年から毎年開催されている『地域の物語ワークショップ』を取り上げました。現在も新たに2012-13年度が進行中。3月24日にはシアタートラムで発表会もあります。ぜひ足をお運びください。[ちから]

[キャロマグ] Vol.1 / Mar.2013

発行日
2013年3月6日

発行
公益財団法人せたがや文化財団
世田谷パブリックシアター
〒154-0004
東京都世田谷区太子堂4-1-1
Tel. 03-5432-1526
<http://setagaya-pt.jp>

編集
藤原ちから

印刷・製本
株式会社アトミ

企画
恵志美奈子、九谷倫恵子、
田幡裕亮、福西千砂都、垂澤大地
(以上世田谷パブリックシアター学芸)

協賛

Asahi アサヒビール株式会社
'TORAY' 東レ株式会社

デザイン
内川たくや
和田美沙季
(以上ウチカワデザイン)

後援
世田谷区

世田谷パブリックシアターとは

世田谷区がつくり、(公財)せたがや文化財団が運営している、演劇やダンスのための専門劇場です。三軒茶屋のキャロットタワーの中に、世田谷パブリックシアター(約600席)、シアタートラム(約200席)の2つの劇場と稽古場、作業場などを擁し、ワークショップやレクチャーなどの参加体験型事業にも力を入れています。



世田谷パブリックシアター（主劇場）



シアタートラム（小劇場）

世田谷パブリックシアターへのアクセス



お問い合わせ 世田谷パブリックシアター

〒154-0004 東京都世田谷区太子堂4-1-1 キャロットタワー5階
Tel.03-5432-1526 (代表) Fax.03-5432-1559
<http://setagaya-pt.jp>

世田谷パブリックシアターは、東京都世田谷区太子堂の三軒茶屋駅前にある26階建ての高層ビル、キャロットタワーのなかにあります。東急田園都市線、東急世田谷線三軒茶屋駅と直結しています。